

●連載

中国版 お婆ちゃんの知恵

6 手作り「紫草油」から「瑞花露」が生まれた

中医学講師
楊 曉波

赤ちゃんが生まれると、家庭は大きな喜びに包まれますが、同時に育児の苦労も生まれます。赤ちゃんの肌がつやつやと健康で成長すれば、何よりですが、赤ちゃんの肌はデリケートですから、お尻や腕と膝の内側、首の周りなどに赤み、ただれなどができやすく、親は大いに悩まされます。

そのようなとき、私の故郷の雲南省昆明市では、親はよく紫草（紫根）を買って、「紫草油」というスキンケア用の「油剤」を作り、赤ちゃんの湿疹の予防と治療に用いています。また、子供が生まれる前に、前もってお婆さんが「紫草油」を用意している家庭も多いのです。

その「紫草油」を作る方法は、まず、乾燥した紫草（紫根）30gを細かく砕いて、口が広い瓶の中に入れ、その上に植物油（菜の花油など）を300ml入れて一週間漬けておきます。漬けているうちに段々と色が変化しますが、液が赤紫色になったら出来上がりです。出来上がった「紫草油」を1日3～5回、赤ちゃんの赤くなった皮膚に塗ると、炎症や湿疹が治まってきます。この方法は古い昔からすでに使われ、家庭のお婆さんから、お母さんへ、お母さんから娘さんへと伝えられています。「紫草油」は刺激がなく、肌の炎症を抑え、肌の修復を早くすることがよく知られています。

「紫草」は苦寒の薬性で、「清熱涼血活血透疹、解毒療瘡」の効能があり、「本草綱目」には“紅斑や丘疹、痘瘡などを治療する”と記載されています。現代では「紫草油」は皮膚の紅斑、丘疹、糜爛、潰瘍、オムツ皮膚炎、神経性皮膚炎、亜急性湿疹、褥瘡、带状疱疹などのほか皮膚の肥厚、

苔癬化に使用できますし、やけどや口内炎などにも効果的です。紫草に金銀花、白芷を加えて同じ方法で作る、出来上がった油にカンフル、ミツロウを入れたものは、「複合紫草膏」といいます。さらに「外科正宗」には当帰、紫草、甘草、血竭、白芷が成分の有名な“生肌玉紅膏”が記載されています。

最近、中国では紫草を主成分とした商品が手軽に手に入られるようになってきました。私が卒業した雲南中医大学の附属病院皮膚科では、院内処方に紫根を含んだ「黄金万紅膏」があり、皮膚の潰瘍、やけど、オムツ皮膚炎、皮膚の感染症にとっても有効で、さらには皮膚を再生させる作用があり、薬疹、紅皮症、尋常性乾癬、带状疱疹、単純疱疹、湿疹などの皮膚病によく使用されています。中医皮膚科のスキンケアではまず、①「外洗」をして（抗炎症、消毒作用のある生薬の煎じ液で患部を洗い、時には湿布をすること）、その後に②「外用」（患部に塗る軟膏剤や油剤、薬用クリーム）を処方し、③急性炎症が落ち着いたら、保湿・抗炎症作用のクリームなどで皮膚のバリア機能を強化することを指導しています。

日本の習慣に合わせ、中医皮膚科の「外洗」の意味合いを込めて、紫根など抗炎症、消毒効果のある成分が配合された「瑞花露ソープ」を開発しました。特に頭、顔、皮膚の調子がよくない時におすすめします。勿論、肌荒れや肌のトラブルを予防するために誰にでも使えます。また、「外用」として、紫草（紫根）に当帰などが配合された紫雲膏や紫草（紫根）、苦参、地黄、当帰、薬用人参などが配合された「瑞花露ローション」と「クリーム」もあります。